バングラデシュ／タニア・ワハブ
――夢を追い続ける女性――

田中麻理

バングラデシュは2021年までの中所得国入りを目指す。そのためには、高い経済成長の実現が不可欠だ。近年、その一端を担うスタートアップ企業の活躍が目覚しい。そして、女性の活躍も。バングラデシュでは今、個性ある女性起業家たちが誕生している。

●1万タカからの起業

タニア・ワハブはその一人、34歳の若き女性起業家だ。彼女は、少女時代「自分の作ったもので人を喜ばせたい」という強い思いを抱いた。13歳の時に地元の物産展で自作の花瓶や小物を販売した経験から、将来の起業を夢見るようになったという。彼女が選んだのは、バングラデシュで良質な素材が手に入る皮革製品。専門学校で技術を学んだ。

専門学校在籍時に起業を決意した彼女に、家族からは猛反対の声があがった。特に、父親は、「公務員などの安定した職」を強く勧めた。しかし、彼女は夢をあきらめなかった。家族の応援も金銭的な支援も得られず、わずか1万タカ（約1万4000円）からのスタートとなった。店は、Karigar（ベンガル語で「作り手」）と名づけた。起業した2006年当時、皮革産業に従事するのは男性ばかり。工房の周辺でも素材を買い付けに行く市場でも、男性から好奇と偏見の眼でみられ、時には罵倒する声にさらされたという。「つらい時もあったけど、夢を実現したい欲求が勝った」という彼女の真剣さは徐々に周囲にも理解されていった。徹底的な市場調査、丁寧なものづくり、熱心な営業により、ビジネスも結実し始める。ターゲットにしたのは、法人用のギフト市場。現在、繁忙期には150人を雇用し、多くの地場大手企業の贈答用の革小物や小売店向けのバッグ類をデザイン・製造している。

●他の女性起業家の資金、情報へのアクセスを支援

様々な逆境を乗り越えてきたワハブは、バングラデシュにおける女性起業家のトップランナーの一人として、後進育成にも献身する。バングラデシュの女性起業家には、地方の農村部でアパレル製品や食品を製造する小規模事業者も少なくない。消費者心理や国内外のトレンド、政府による融資制度といった成功に欠かせない基本情報にアクセスできていない点は大きな課題だ。彼女はこれらの課題を自分の経験を共有することで解決しようと試みている。「後進が育ってくれれば、皆の利益に、ひいては国の利益に繋がる」という彼女の想いの表れだろう。

テレビ番組に出演するワハブ（写真提供：タニア・ワハブ）

最近では、ケーブルテレビに月2回出演する。起業を志す人や若手起業家から寄せられる疑問や悩みに、彼女が助言するという番組だ。彼女の存在とストーリーは数多くの女性に希望ときっかけを与えている。働く女性の端くれである筆者にとっても、成長に欠かせないのは「先輩」というお手本の存在だ。特に仕事のコツやちょっとした悩みの解決方法は、本やインターネットだけでは学べない。先輩の経験を追体験することで乗り越えられることは多い。

●夢は続く

ワハブは自分を磨くことも忘れない。また、後進起業家のため、海外進出への道も先陣を切って切り開こうとしている。常に新しいデザインを模索し、海外への輸出にも乗り出している。2016年には東京のアパレル展示会へ出展した。現在も中東や欧州諸国からのオーダーを受けるが、今後日本とのビジネスも念頭に入れる。彼女の夢はバングラデシュから世界へと続いている。

（たなか　まり／ジェトロ　海外調査部）